

本扉（後送）

はじめに

「気楽に読む」が最良のミステリー読書法

推理小説は娯楽のための読み物である。エンターテインメントなのだから、読んで楽しいことが一番だ。肩の力を抜き、気楽に読めばいい。それが最良の読書法なのだ。

しかし、読んで楽しいミステリーをもっと楽しむには、やはり、ある程度の基礎知識や雑学的な知識があったほうがいい。たとえば、プロ野球を観戦するときでも、ただ漫然と眺めているより、個々の選手の過去のデータとか、そのチームの対戦成績とか、あるいは監督が得意とする戦略などを知っていれば、より楽しく観戦できるのと同じである。

一八四一年にエドガー・アラン・ポーが『モルグ街の殺人』という風変わりな短編小説を発表して以来、わずか一八〇年の間にミステリーは多様に発展して、色とりどりに開花した。映画やテレビ、さらにはマンガにも多くのストーリーを提供し、文芸ジャンルの主流を占め、ますます隆盛の一途である。

その一方、歴史が古いだけに、これからミステリーを読みはじめの読者には手軽なガイド・ブックが必要となろう。より楽しく、ミステリーを読むためのガイド・ブックとして、本書を書いてみた。

オモチャ箱をひっくり返したみたいに、あれこれ、とりとめのないテーマで書いてみたが、気ままにミステリー散歩を楽しんでいただくためのガイドになれば幸いである。

とはいっても、かた苦しい評論でもなければ、専門的な研究書でもない。ミステリーに関する意外な話や豆知識、トリックの紹介を読物ふうにもまとめてみたので、どのページからでも、手あたり次第に読んでいただいてかまわない。

本書では、文章の内容に応じて「推理小説」「探偵小説」「ミステリー」という表記を使いわけている。表記が一定でないこと、ご了承ねがいたい。

海外作品の邦題は、一般的と思われるタイトルを著者判断で採用した。

また、章末にまとめたトリック出典の作品収録書も著者判断で比較的入手し易い書籍を選んだつもりだが、一部、品切れ本を含んでいる。また、近年は書籍のサイクルが早いため、本書の刊行と前後して品切れとなってる単行本があるかもしれない。ご容赦いただきたい。

藤原宰太郎

はじめに 「気楽に読む」が最良のミステリー読書法 iii

プロローグ

読むためにも知っておきたい推理小説のルール xiii

第一章 ミステリーを10倍楽しく読む方法

推理小説に関する雑学知識

- 私立探偵の元祖はドロボウ出身 2
- 世界最大のピンカートン探偵社 3
- 日米私立探偵事情 4
- 推理小説はアメリカ生まれ 5
- 世界最初の長編推理小説 7
- なぜ、推理小説ブームなのか? 8
- 感傷を切りすてたハードボイルド小説 9
- 名探偵の私生活拝見 10
- シャーロック・ホームズは麻薬中毒だった 11
- 東西同一トリックを検証すると…… 13

トリックの一致もやむなしの現代ミステリー事情	15
推理小説と密室トリック	18
密室トリックは限界という意味	19
日本ミステリーの鉄道事情	20
カルネアデスの板を知っているか	22
法律を利用した捨て身のトリック	23
空前の大ロングラン推理劇	23
複雑化する暗号小説	25
ベルリンの壁とスパイ小説	26
科学捜査の進歩はミステリー作家泣かせ	27
指紋がなぜ、きめ手になるのか	29
指紋学の出発点は日本の慣習から	30
指紋を消したギャングの末路	31

第二章

事実は小説よりもミステリー

古今無双の推理作家列伝

- 同一作者が対談するトリックとは 36
- 二人で一人のミステリー作家 36
- 四人揃えば新人作家 39
- 作者の名前と探偵の名前 40
- ミステリー作家の量産レース 41
- 懸賞応募落選から流行作家へ 43
- 内容さえよければ受賞できる 44
- 芸能界から推理作家へ転職した男 45
- 楽観的な占いが見事に的中 46
- 推理小説ブームの火付け役は車イスの女流作家 48
- 刑務所は最高のミステリー学校 49
- クリステイーを有名にした失踪事件 49
- トリックなら奇術師作家におまかせ 50
- 技巧は作家の「いかにも」な特技 51

第三章

こんなミステリーがあった

知られざる推理小説ガイド

- まぎらわしいペンネームにご注意 51
- 三〇を越えるペンネームを持つ作家 53
- 推理作家になるには入院すべし? 54
- 公約を破って公約を証明したヴァン・ダイン 55
- ミステリー作家の悲劇的な最期 56
- 大統領はミステリーがお好き 57
- 読者を犯人にした究極の大トリック 60
- 犯人⇨被害者の怪トリック 60
- 結末のわからないミステリー 62
- あの世が舞台のミステリー 65
- 犯人と死体が多すぎる 65
- もれなく証拠品がついてくる 67
- 味覚が暴く犯罪 69

犯人は見た	70
最長ミステリーは日本製	70
透明人間のミステリー	72
日本エキゾチズムの珍本	74
閉ざされた環境下での犯罪	75
嘲笑う悪人、敗れる探偵	77
読まれない「名作」あれこれ	78
童謡は殺しのメロデー	79
新素材で大変身	81
あなたは犬派か、猫派か	81
タバコとミステリー	84
将棋とミステリー	85
写真とミステリー	86
エレベーターとミステリー	88
誘拐ミステリー傑作選	89
脱獄ミステリー傑作選	91
考古学ミステリー傑作選	92

江戸の捕物帳傑作選 94

〈黒〉の推理小説 97

第四章 古今東西トリック研究

難事件に謎に挑戦せよ

時計のトリック	102
電話のトリック	108
郵便のトリック	115
草花のトリック	120
鳥のトリック	125
動物のトリック	130
虫のトリック	133
車のトリック	136
鉄道のトリック	142
乗り物のトリック	147

第五章

世界のユニーク探偵たち

名探偵紳士録

- 酔いどれ探偵 162
シルバー探偵 164
盲目探偵 165
最年少の探偵 166
名なし探偵 167
トラベル探偵 169
リッチ探偵 171
幽霊探偵 172
名探偵の死 173
ヘビースモーカー探偵 176
世界の偉人は名探偵 178

あしがき 182

プロローグ

読むためにも知っておきたい推理小説のルール

謎解きを中心にした本格ミステリーは、作者が読者に出題する知的ゲームの小説であるから、そこには当然、作者の側が守らなければならない最低限の条件がある。読者をペテンにかけるようなインチキをしないで、フェアプレイに徹することだ。

そんな良心的な信念から、小説を書くうえで、いろいろなルールを自分に課した作家がいる。おおげさに言えば、ミステリー作家の憲法である。

こんな憲法を思いついたのも、それまで低俗な読み物だった推理小説をすこしでも知的水準の高い読み物に引きあげようとする作家の願いだったからである。

とくに有名なのが、ヴァン・ダインの「二十則」と、ロナルド・ノックスの「十戒」である。ヴァン・ダインというのは、『グリーン家殺人事件』や『僧正殺人事件』などの名作を書いた本格ミステリーの第一人者である。彼が一九二八年に発表した『探偵小説作法の二十則』を要約すると……。

- ① 事件の謎をとく手がかりは、すべて明白に記述されていなくてはならない。
- ② 作中の犯人がしかけるトリック以外に、作者が読者をペテンにかけるような記述をしてはいけない。
- ③ 不必要なラブロマンスをつけ加えて、知的な物語の展開を混乱させてはいけない。ミス・テリーの課題は、あくまで犯人を正義の庭に引き出すことであり、恋に悩む男女を結婚の祭壇に導くことではない。
- ④ 探偵自身、あるいは捜査員の一人が、突然、犯人に急変してはいけない。これは、恥しらずのペテンである。
- ⑤ 論理的な推理によって、犯人を決定しなければならない。偶然や暗合、動機のない自供によって、事件を解決してはいけない。
- ⑥ 探偵小説には、かならず探偵役が登場して、その人物の捜査と、一貫した推理によって、事件を解決しなければならない。
- ⑦ 長編小説には、死体が絶対に必要な。殺人より軽い犯罪では、読者の興味を持続できなない。
- ⑧ 占いや心霊術、読心術などで、犯罪の真相を告げてはならない。
- ⑨ 探偵役は一人が望ましい。一つの事件に、複数の探偵が協力しあって解決するのは、推

理の脈絡を分断するばかりでなく、読者に対して公平を欠く。それはまるで読者をリレー・チームと競走させるようなものである。

⑩ 犯人は物語の中で重要な役を演ずる人物でなくてはならない。最後の章で、ひよっこり登場した人物に罪を着せるのは、その作者の無能を告白するようなものである。

⑪ 端役はやくの使用人などを犯人にするのは、安易な解決策である。その程度の人物がおかす犯罪なら、わざわざ本に書くほどのことはない。

⑫ いくつ殺人事件があっても、真の犯人は一人でなければならぬ。ただし、端役はやくの共犯者がいてもよい。

⑬ 冒険小説やスパイ小説ならかまわないが、探偵小説では、秘密結社やマフィアなどの組織に属する人物を犯人にしてはいけない。彼らは非合法的な組織の保護を受けられるのでアンフェアである。

⑭ 殺人の方法と、それを探偵する手段は、合法的で、しかも科学的であること。空想科学的であってはいけない。たとえば毒殺の場合なら、未知の毒物を使ってはいけない。

⑮ 事件の真相をとく手がかりは、最後の章で探偵が犯人を指摘する前に、作者がスポーツマンシップと誠実さをもって、すべて読者に提示しておかなければならない。

⑯ よけいな情景描写や、わき道にそれた文学的じやうぜつな饒舌は省くべきである。

⑰ プロの犯罪者を犯人にするのは避けること。それらは警察が日ごろ取りあつかう仕事で

ある。真に魅力ある犯罪はアマチュアによっておこなわれる。

⑱ 事件の結末を事故死とか自殺で片づけてはいけない。こんな竜頭蛇尾りゅうとうだびは読者をペテンにかけるものだ。

⑲ 犯罪の動機は、個人的なものがよい。国際的な陰謀とか、政治的な動機は、スパイ小説に属する。

⑳ 自尊心のある作家なら、つぎのような手法は避けるべきである。これらはすでに使い古された陳腐ちんぷなものである。

㉑ 犯行現場に残されたタバコの吸い殻と、嫌疑者が吸っているタバコをくらべて、犯人をきめる方法。

㉒ インチキな降霊術で、犯人をおどして自供させる。

㉓ 指紋の偽造トリック。

㉔ 替え玉によるアリバイ工作。

㉕ 番犬がほえなかつたので、犯人はその犬になじみのある者だったとわかる。

㉖ 双子の替え玉トリック。

㉗ 皮下注射や、即死する毒薬の使用

㉘ 警官と一緒に密室状態の現場へ踏みこんだ直後の殺人。

㉙ 言葉の連想テストで、犯人を指摘すること。

③土壇場で、探偵があっさり暗号を解読して、事件の謎をとく方法。

この「二十則」を読むと、ヴァン・ダインがいかに精密な論理で構築したフェアな本格ミステリーを書こうと努力していたのかよくわかる。それだからこそ、『グリーン家殺人事件』や『僧正殺人事件』など、古典的名作に挙げられる傑作が生まれたのである。

一方、ノックスの「十戒」は、ヴァン・ダインの「二十則」より一年おかれて発表されたものである。ロナルド・ノックスは英国のカトリック教会の大僧正であるが、大の推理小説マニアだったので、余暇に『陸橋殺人事件』や『密室の行者』などの名作を書いた異色の作家である。

彼が編纂した年鑑傑作選（邦訳は『ノックスの十戒』の「序文」の中で発表した「十戒」は、ヴァン・ダインの「二十則」とくらべるとかなり大ざっぱで、しかも重複する項目が多いので、ここで紹介するのは省くが、ただ一つだけ、ちょっと奇異な感じがする項目がある。それは第五項に「中国人を登場させてはならない」とあることだ。

現在の人権意識からすれば偏見であるが、おそらく当時の英国では、中国人は得体的（えたい）しれない神秘的な術でも使うと思われるのではなからうか。現に、この項目の補足に、「もし読者が探偵小説を読んでいて、『チン・ルウの細い切れ長の目が……』と書いてあるのに出くわしたら、そんな本はすぐに読むのを中止したほうがいい」とある。中国人が登

場するようなミステリーは安っぽい小説だというわけだ。

しかし、いくら当時の風潮だったとはいえ、大僧正ともあろう知識人が、なぜ差別的な一項を加えたのか、ちよつと理解に苦しむ。

ともあれ、「二十則」にしろ、「十戒」にしろ、古い過去の「憲法」である。こんな遺物のようなルールを四角四面に守っていたら、味もそつけない教条主義的な推理小説しか生まれまいだろう。むしろ、これらのタブーを破ることによって、傑作が生まれるのである。

この代表的な例が、アガサ・クリスティーの長編にある。これは事件の記述者が犯人だったという、読者をペテンにかける大トリックであるから、「二十則」の①と②の項に違反している。違反したことによって、かえって傑作のほまれが高いのだ。

ミステリーが多様化した現代では、これらのタブーに挑戦してこそ、新しい形式の名作が生まれる可能性がある。この「二十則」は、もはや守らなければならないルールではなく、古きよき時代の記念碑にすぎない。事件の謎を推理する論理に一貫性さえあれば、むしろ進んで打破すべきものである。

第一章・ミステリーを10倍楽しく読む方法

私立探偵の元祖はドロボウ出身

ミステリーに登場する私立探偵の第一号は、エドガー・アラン・ポーの短編『モルグ街の殺人』で活躍するオーギュスト・デュパンである。私立探偵というより、彼の場合は天才的なアマチュア探偵だが、それでは、実在したほんものの私立探偵の元祖はだれか？

フランソワ・ヴィドックという男である。一八三二年、ヴィドックはパリで事務所をひらき、礼金をとって事件を捜査する新しい職業、つまり私立探偵を開業した。

だが、この男、じつは前歴が大ドロボウだったのである。三回も脱獄したうえ、警察の追跡をふりきって逃げる悪党だったので、パリ警察の総監はその巧みな変装術と機敏な行動力に舌をまき、彼の罪をゆるして、自分の配下においたのである。それからパリ警察の密偵^{スパイ}として活躍し、国家警察パリ地区犯罪捜査局の局長にまで出世した怪人物だった。

なにしろドロボウあがりだから、犯罪の手口にくわしく、捜査はお手のもの。むかしの悪党仲間を手下につかって大活躍し、はなやかな社交界にも出入りするほどの有名人になったのである。

彼の波乱万丈の人生は評判になり、当時の文学作品には、ヴィドックの名がしばしば登場する。例えば、フランスの文豪ヴィクトル・ユゴーは、この怪人物の波乱の人生から暗示をうけて、大作『レ・ミゼラブル』の主人公ジャン・ヴァルジャンを創造したといわれ

ている。

また、ポーも、『モルグ街の殺人』の中で、

「勘も鋭いし、忍耐強い男だ。でも、無学だから、捜査に熱心になるあまり、いつも失敗ばかりしていた」(丸谷才一・訳)

と、名探偵デュパンにちくりと皮肉を言わせている。

世界最大のピンカートン探偵社

アメリカでは、私立探偵のことをジ・アイ(目)、またはプライベート・アイ(私的な目)とも呼ぶが、これは有名なピンカートン探偵社の社章バッジからきているのだ。

この社章は、大きく見ひらいた目の下に、(へわれわれは眠らない)という言葉が彫つてある。つまり、一日二四時間営業がモットーなのである。

このピンカートン探偵社は、一八五〇年、大統領選挙に立候補していたエイブラハム・リンカーンの暗殺計画を未然に防いで有名になったアラン・ピンカートンが、シカゴで開業したものである。彼は郵政省の特別捜査官として、列車強盗や銀行ギャングを片っぱしから捕まえていたが、やがて独立し、私立探偵社をひらいた。当初、部下は一〇人に満たなかった。

当時のアメリカは、まだFBIのような強力な警察機構がなかったので、ピンカートンは無能な保安官たちを尻目しりめに、めざましい活躍をして、そのたびに探偵社は大きく成長してきたが、労働組合との対立や警察組織の近代化の影響で徐々に衰退しはじめ、一九六〇年代にはピンカートン社と名前を変えている。一九九九年にスウェーデンの警備会社に買収され、同社のアメリカ法人となった。

推理作家のダシル・ハメットは、無名時代、このピンカートン探偵社の調査員をしたことがあり、その経験を生かして、『血の収穫』や『マルタの鷹たか』など、行動的な私立探偵が活躍するハードボイルドの名作を書いたのである。

日米私立探偵事情

アメリカで私立探偵になるには許可証ライセンスがある。許可証ライセンスの発行は州によって違うが、たとえばニューヨーク州で個人営業の許可証ライセンスを得るには、警察か正規の探偵社につとめて三年以上の経験がなければならない。

そして、保証金を積みたてて、州の許可証サービス課に申請すると、前歴をくわしく調べられたうえ、法律用語や捜査技術に関する筆記試験を受けなければならない。

それに合格して、いよいよ開業する段になると、まず電話つきの事務所が必要になる。

自宅兼用や電話取り次ぎサービスですますことは認められない。さらに登録料を支払い、二年ごとに免許の更新手続きをしなければならぬのだ。

これだけ面倒な手続きをへて取得した免許証ライセンズであるから、それを没収されたら目もあてられない。

現実にアメリカでは、どれぐらいの私立探偵がいるのか正確な数はわからないが、一八六六年に刊行された小鷹信光こだかのぶみつの『ハードボイルドの雑学』には、約一〇万人（ロス・アンゼルス市だけでも、四、五〇〇〇人）いたと書かれており、現在では、もつと増えているだろう。アメリカでは職業として、りっぱに成り立っていることになる。

その点、日本では、私立探偵になるための許可証ライセンズは必要なく、だれでも自由に開業できるものの、なんの権威も権限もない。信用調査をおもに仕事にする興信所はともかく、犯罪捜査にタッチする私立探偵はゼロにひとしく、せいぜい刑事弁護士の下働きをする程度である。

推理小説はアメリカ生まれ

アメリカの詩人、エドガー・アラン・ポーが世界で最初の推理小説『モルグ街の殺人』を発表したのは一八四一年である。この作品は、ポー自身が編集に携っていた雑誌『グレ

『アムズ・マガジン』一八四一年四月号に掲載された。

ふしぎな謎をテーマにした物語は、エジプトや中国、日本にも古くからあったのに、一八〇年ほど前、突然、新興国のアメリカで推理小説が生まれたのは、なぜか？

移民の国アメリカは、国家権力のつよい警察機構ができるより前に、自治制度が発達した。開拓民たちは自分たちで自衛の組織をつくったのである。

そこが、ヨーロッパ諸国やアジアの国々とはちがう点である。西部劇映画を見てもわかるように、事件を捜査する保安官は、犯罪捜査のプロではない。

ピストル射撃のうまい正義感が住民の投票によって選ばれるのだ。そんなアマチュアが容疑者を逮捕したところで、はたして真犯人かどうか疑わしいことを市民は知っているのだ。当然、裁判のなりゆきに注目する。

そして、その裁判も陪審制である。被告の有罪か無罪を決めるのは、プロの裁判官ではなく、一般の市民から選ばれた人たちである。法律のことにはズブの素人の彼らが、検事側と弁護側の証言をきいて推理し、有罪か無罪かを決めるのである。

善良な市民なら、だれでも陪審員になれるチャンスがあるのだから、突然、事件の捜査や裁判というものに関心をいだく。

ここに、推理小説がアメリカで誕生する素地があったのだ。

世界最初の長編推理小説

推理小説の元祖『モルグ街の殺人』は、同時に、短編推理小説の第一号でもあるが、それでは長編推理小説の第一号は何か？

定説では、一八六六年に新聞連載された、エミール・ガボリオの『ルルージュ事件』とされているが、それ以前に書かれた長編推理小説も存在していた。

一八六二年から六三年にかけて週刊誌『ワンス・ア・ウィーク』に連載された、チャールズ・フィリックスの『ノッティング・ヒルの怪事件』である（単行本は一八六五年に刊行）。現在、大英図書館の調査によるものとして、『ギネスブック』に世界最初の長編推理小説と認定されている。

『ノッティング・ヒルの怪事件』は、多額の保険金をかけていた女性が殺された事件に疑惑を抱いた保険調査員が、調査に乗り出すという話である。

殺人方法は他愛ないトリックだが、作家のジュリアン・シモンズは、著書『ブラッディ・マード』で本作が長編推理小説の先駆的作品であると指摘し、その根拠を詳しく語っている。

フランスで実際にあった事件をヒントにした、ウィルキー・コリンズの『白衣の女』^{びやくえ}は一八五九年に雑誌連載された長編で、病院を利用した人物すり替えや准男爵による財産横

領の企みがみられるが、こちらは推理小説というより犯罪小説というべきであろう。

パリの暗黒街を背景に、誘拐や監禁、殺人事件などを描いた、ウージェーヌ・シュアの『^{パリ}巴里の秘密』は、『白衣の女』よりもさらに古い一八四二年に発表された長編だが、風俗小説の要素がつよく、こちらも長編推理小説の第一号と言うのは苦しい。

やはり、『ノッティング・ヒルの怪事件』こそが、世界最初の長編推理小説であろう。

なぜ、推理小説ブームなのか？

「推理小説は、本質的に民主主義的であり、民主主義のなかでのみ開花する」

これはミステリー評論家ハワード・ヘイクラフトの言葉である。この名言どおり、推理小説が盛んな国は、発祥の地アメリカと、その本家にあたるイギリスで、ともに民主主義の国である。

国家警察の権力がつよく、全体主義的な政治を好むスラブ民族（ロシア）や、ゲルマン民族（ドイツ）の国では、あまり推理小説は流行しない。またラテン民族（イタリアやスペイン）は、理性より情熱に走りやすいので、理屈っぽい推理小説はあまり性分に合わないらしい。

その点、第二次大戦後、日本で推理小説が大衆文学の王座を占めたのは、民主主義が普

及したことの一つの証拠ともなって、おおいに喜ばしい。だが、江戸時代の昔から官僚政治が発達し、中央集権的な警察機構の充実したわが国で、どうしてこれほどまでに推理小説が流行するのか、ちょっと不思議な感じがしなくてもない。

アメリカから輸入された民主主義の影響だけとは考えられない。むしろ、両国民のあいだに共通する野球好きの面と、あるいは一脈、通じる点があるのだろうか。

このブームの原因を比較文化的に解明できたら、立派なミステリー評論家になれるだろう。

感傷を切りすてたハードボイルド小説

ハードボイルドというのは、直訳すると〈固くゆでた卵〉である。半熟卵のようにべとべとした感傷や、ねちねちした感情を切りすてて、冷酷非情な行動で事件の真相を追究するのである。

このスタイルを最初に創作したのが、ダシル・ハメットである。『マルタの鷹』や『血の収穫』は、その元祖にふさわしい傑作である。

この新しい形式はアメリカ人の生活感覚にぴったりマッチしたので、たちまちアメリカの推理小説の主流になった。

ハードボイルド小説の文学性を高めたのが、『大いなる眠り』や『長いお別れ』を書いたレイモンド・チャンドラーで、ちょっぴり内省的な思索で味つけたのが、『さむけ』を代表作にするロス・マクドナルドである。この三人をハードボイルド派の御三家という。とくに日本ではチャンドラーの人氣が高く、

「タフでなくては生きていけない。優しくなければ生きていく資格がない」（生島治郎・意訳）

と、私立探偵フィリップ・マローウがつぶやく名セリフが受けている。

名探偵の私生活拝見

本格ミステリーの巨匠エラーリー・クイーンが、推理小説の創作講座に特別ゲストとして招かれたときのことである。

「クイーンさん、さしつかえなければ、あなたの小説に登場する名探偵のセックス・ライフがどうなっているのか教えていただけませんか？」（飯城勇三・訳）（いいきゆうさん）

と質問されて、クイーンは目を白黒させたというエピソードがある。

質問したのは、ハードボイルドの元祖ダシル・ハメットだった。ハードボイルド小説はヒーローの私立探偵を血のかよった生身の人間としてリアルに描くのが建前であるから、

当然、彼らの私生活やセックス・ライフも、程度の差はあれ、かなり具体的に描かれている。とくに近年のネオ・ハードボイルドはベッド・シーンがくわしく書かれている。

それにくらべて、本格ミステリーに登場する名探偵たちは、探偵としての活躍以外となると、無色透明な人間である。

シャーロック・ホームズやエルキュール・ポワロ、きんだいちこうすけ金田一耕助やかみづきようすけ神津恭介など、天才型の名探偵たちは独身者が多いとはいえ、女性との付き合いが皆無なはずもなく、特定の女性と交際しているようなシーンもみられない。まさか推理のために〈灰色の脳細胞〉を酷使しすぎて、女性に興味をなくしたわけでもあるまいが、不思議といえば、まことに不思議である。

それだからこそ、ハメットがちよっぴり皮肉をこめて、クイーンにこんな質問をしたのであろう。

シャーロック・ホームズは麻薬中毒だった

タレントやミュージシャンが違法薬物の不法所持で逮捕されるニュースを聞くたびに、あの名探偵シャーロック・ホームズが現代に生きていたなら、とつくに逮捕されて、有罪判決を受けているにちがいないと思う。なぜなら、彼はコカインの常用者だったからであ

る。

彼がコカインを注射したり、言及したりする場面は、一〇作品ほどに出てくる。とくに『四つの署名』では、(一面に無数の注射の跡がある二の腕)に注射するシーンがくわしく描いてある。無数の注射針の跡というから、ものすごい。七パーセントのコカイン液を日に三回は打っていたらしい。

彼がコカインを注射するのは、事件がなくて退屈しているときである。精神が単調になるのを極度にきらって、刺激をもとめるのだ。

それにしても、作者コナン・ドイルは医者だったのに、なぜこんな危険な悪癖を自分のヒーローに与えたのだろうか？ ホームズは色好みでもないし、金銭にも淡泊で権勢欲もない。タバコはやたらに吸うが、酒に酔って羽目をはずしたことなど一度もない。

こんな堅物かたぶつな探偵ではあまり面白くないので、天才児の特異性を強調させるために、コカインを愛用させたのだろう。当時のイギリスでは、コカインは麻薬だという観念がなく、自由に市販されていたのだ。

ところが、一八九〇年ごろから、しだいにコカインの害があきらかになったので、ドイルも後半の作品では、ホームズにコカインの使用をやめさせている。それはちょうど最近の嫌煙権の普及と同じである。

しかし、ホームズがコカインの愛用者だったというのは、推理に天才ぶりを発揮する彼

世界の偉人は名探偵

推理小説の魅力は、トリックの謎をとく知的なスリルとともに、名探偵の活躍にある。その探偵がミステリー作家の創造した架空の人物ではなく、歴史に名を残した実在の人物であれば、いっそう興味ぶかい。

歴史に名を残すほどの人物なら、その波乱にみちた生涯に一度は不思議な事件にぶつかり、その特異な才能を發揮して、事件の謎を推理したことがあるにちがいない。このアイディアから生まれたのが、史上の有名人を探偵役にした推理小説である。

その代表作にシオドー・マシソンの短編集『名探偵群像』がある。アレキサンダー大王、万能の天才レオナルド・ダ・ビンチ、白衣の天使ナイチンゲール、アフリカの探検家リビングストンなど、いろいろな分野の偉人が、その強烈な個性と特異な才能を發揮して、それぞれ難事件をみごとに解決するのである。

第13回江戸川乱歩賞を受賞した海渡英祐（かいとえいすけ）の『柏林——一八八八年』も、歴史ミステリーの名作である。

明治の文豪・森鷗外が青年時代、医学生としてドイツに留学中、ベルリン郊外の古城でおきた密室殺人事件の謎を推理するのである。鷗外ファンには見逃せない作品だ。同じ作者には、海道一の大親分といわれた清水の次郎長を探偵にした短編集『次郎長開化事件

簿』がある。

森鷗外より夏目漱石のほうが好きだという人には、歴史ミステリーを得意とする楠木誠一郎の『名探偵夏目漱石の事件簿 象牙の塔の殺人』がおすすだ。

明治時代の東京を舞台に、夏目漱石が連続殺人事件の謎に挑むのだが、寺田寅彦や泉鏡花など、同時代の文筆家も多数登場する。

同じ作者の『タイムスリップ探偵団』第一作『坊っちゃん名探偵!』には、少年時代の夏目漱石が登場する。タイムスリップした少年探偵団と一緒に、誘拐された樋口奈津（樋口一葉の本名）を助け出すのだ。森鷗外が登場して夏目少年にヒントを与えたり、名作『坊っちゃん』に絡ませたオチを用意したり、サービス精神も満点。史実とフィクションの入り混ぜ方が絶妙で、小中学生向け作品ながら、あなどれない作品である。

芥川龍之介のファンには、井沢元彦の『ダビデの星の暗号』をおすすだ。これは若き天才作家・芥川龍之介が、その博識と鋭利な推理によって、日本史上に名高い伊達騒動の裏面にかくされた謎をとくミステリーである。

また同じ作者の『五つの首』と短編集『修道士の首』では、戦国時代の英雄である織田信長が、するどい直観力と合理的な判断力で難事件や怪事件の謎を快刀乱麻のごとく解決するのである。

源氏物語の愛読者には、第4回サントリー・ミステリー大賞の読者賞に入選した長尾誠

あとがき

推理ミステリーに興味を持ち、この本を手にとってくれたみなさん。

長い歴史をもつ推理小説にまつわる雑学やウンチクの数々はいかがでしたか？
最後まで読んでくれてありがとうございます。

この本は、私の父である藤原宰太郎が一九九〇年に書いた『真夜中のミステリー読本』の改訂新版です。

原本が刊行されてから三〇年の間で、世の中には携帯電話やインターネットなどが普及し、私たちの暮らしは当時からは想像もできないくらい便利になりました。

推理小説も紙の本で読む時代から電子書籍で読む時代になり、むしろ翻訳や新作も電子書籍でしか読めない作品が増えています。

そうした二一世紀のIT社会にも通用するミステリーの案内書ガイドを作りたいという父の遺志を引き継ぎ、娘の私が加筆や訂正、および項目の削除を行い、『真夜中のミステリー読

本』を生まれ変わらせました。

父・藤原宰太郎は、推理小説家であると同時に、古今東西のミステリーを読みあさり、その中に出てくるトリックを収集し分類する推理トリック研究家でもありました。

何千冊という膨大なミステリー本で埋め尽くされた父の書斎はとても不思議な空間で、たとえば荷台に部屋の鍵をのせたラジコンのトラックとか、倒れた植木鉢から妙な方向に生えてきている植物とか、砂をパンパンにつめた靴下とか、そんなヘンテコなものもいくつかも転がっていました。

そして、床に散らばった原稿用紙の裏には、死体の絵が書きなぐってあったり……。

幼い頃の私は、なんだか気味の悪い部屋だと敬遠しがちでしたが、今から思えば、父は小説の中のトリックを実証したり、自分なりの新しいトリックを考え出したりしていたのでしよう。

それらの自作のトリックをもとに書き上げたのが《名探偵・久我京介シリーズ》で、これはテレビドラマにもなりました。主役の久我京介はトリック研究家で、書斎にこもって推理小説ばかり読んでいるという、まさに父の分身のようなキャラクターで、話を聞いただけで難事件を解決していく安楽椅子探偵です。

藤原幸太郎 (ふじわら・さいたろう)

1932年3月6日、広島県尾道生まれ。本名は幸(おさむ)。早稲田大学露文科卒業後、病気療養のため帰郷し、国内外の推理小説を涉猟しながら『探偵倶楽部』や『宝石』などの雑誌へ短編を発表する。86年には初の書下ろし長編『密室の死重奏(カルテット)』を刊行。一時的な休筆期間を経て、寡作ながら別名義で創作活動を再開するが、2008年に脳梗塞を患い断筆する。2019年5月21日死去。

藤原遊子 (ふじわら・ゆうこ)

藤原幸太郎の長女。早稲田大学社会科学部卒業。コピーライター。

改訂新版 真夜中のミステリー読本

2019年12月20日 初版第1刷印刷

2019年12月25日 初版第1刷発行

著者——藤原幸太郎、藤原遊子

発行人——森下紀夫

発行所——論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

tel. 03(3264)5254 fax. 03(3264)5232

振替口座 00160-1-155266 <http://www.ronso.co.jp/>

ブックデザイン——奥定泰之

校正——浜田知明

組版——フレックスアート

印刷・製本——中央精版印刷

©Yuko Fujiwara, Printed in Japan

ISBN 978-4-8460-1886-3

落丁・乱調本はお取り替えいたします。